

優 秀 賞

山城高校に望むこと

西 畑 実 佳

私は山城高校でとても大事なものを見つけた。何を見つけたかというと、それは友達である。友達なんてどこだって作れる、今までだっていただろうと思うかもしれない。しかし、これは山城にしかないものだ。私は考えている。なぜそのように考えているのかというと、私の今までの経歴が深く関わっている。私は親の事情で、転校を繰り返していた。私はそのたびに友達を作ろうとした。でも、それは簡単なことではなかった。学校には「校風」というものがある。そしてまた、クラスには校風の中で作り上げられたクラスの雰囲気、個人にも個人の個性というものがある。その3つの壁を越えた時、やっと友達になれたんだ。私は思う。大げさだと思われるかもしれない。だが、本当に友達を作るのは大変なことなのである。それはまた、学年があがればあがるほど難しくなる。なぜかというと、3つの壁にもう一つ加わる壁ができていくからだ。この壁というのは

信頼関係である。私が入ってくる前に築かれてきた友達という信頼関係があり、よそ者を入れる隙間を与えないのだ。壁を越えれずクラスで孤立したときもあった。友達はいたけれど、自分から話しかけ、その人に合わしていた。壁を越えられないまま転校を繰り返した。私は逃げていたのだ。本当の自分が傷つくことを。しかし、傷つかなければ友達ができないということも分かっていた。

「自分は自分らしくなり友達を作ろう」、そう決心して高校を受験しようと考えた。勉強もできるところに行きたいと考えていたので、どこの高校に行こうかとても悩んだ。高校のパンフレットを見れば、進学実践などで勉強のことはある程度分かったが、私は不安だった。なぜなら校風も、クラスの雰囲気も、個人の個性も分からなかったからである。信頼関係が真つ白であるということは私にとって幸いだったが、やはり不安だった。高校は絶対に楽しいものになりたい、毎日友達と笑いあう、そして勉強もがんばって充実した生活を送りたい。でも、うまくいかないかもしれない、またなじめないかもしれない、今までのような生活が続いてしまうのか、考えても考えても出ない結論。私はできるかぎりそのことを考えないようにするため勉強に没頭していった。それでも考えてしまうときは、学校を直接見に行って、少しでもそれぞれの学校の雰囲気をつかもうとした。

真つ白な未来には慣れている。ただ、その後起こるかもしれない事への不安は人一倍だったと思う。パンフレットで知った山城高校を初めて訪れた時、ちょうどサッカー部が練習していた。彼らを見て、なんだか自分の持っていた不安がばからしくなった。すごく生き生きした姿であった。友達同士で相談したり、バスを回したり、サッカー部なのだから当たり前のことなのだが、他の学校で見た生徒たちとはひと味違ふ何かがあった。彼らのような生徒が集まる学校はきつとすばらしいだろう。「こしかない」と思い、私は山城高校への受験を決めた。そして、私は山城高校に入学することができた。現在、私は毎日友達と笑い合つて楽しい高校生活を送っている。私は何にひかれて山城高校に入ったのだろうか。あんなに不安だった私を変えたものは何だったんだろうか。今なら分かる気がする。山城高校の先輩たちが作り上げてきたこの学校の校風だったのではないかと思つている。暖かくて、頼もしくて、安心感がある、この校風はこの学校の財産であり、私たち山城高生の誇りである。この校風によつて私たちは、たくさんの方達を見つけることができた。友達と共に自信を与えてくれた校風にとても感謝している。先輩たちが作り上げてきた校風を守り、そして今以上にすばらしいものにしていきたいと思う。きつとこれからたくさんの方達が入学してくるだろう。そして彼らも多くの不安を持つ

て入ってくるのだらう。この校風を後輩たちに受け継いでもらい、彼らも笑顔で学校生活を送ってくれることを願っている。そして、この校風を守り続けてくれることを望んでいるのだ。

